

令和 7 年度第 4 回堺市文化芸術審議会議事録

1 開催日時

令和 7 年 10 月 15 日（水）14 時 00 分～16 時 00 分

2 開催場所

フェニーチェ堺 多目的室

3 出席委員（50 音順）

井上信太委員	（美術家）
坂成美保委員	（読売新聞編集局編集委員）
永井泉委員	（公募委員）
永島茜会長代理	（武庫川女子大学准教授）
藤野一夫会長	（神戸大学名誉教授 芸術文化観光専門職大学名誉教授）
藤原麻喜子委員	（公募委員）

4 出席議事関係者（50 音順・敬称略）

上田假奈代 （堺アーツカウンシルプログラム・ディレクター）

5 事務局職員

文化国際部長、文化課長、文化課長補佐、文化課企画係長ほか

6 関係者

公益財団法人堺市文化振興財団事務局長、総務課長、事業課長、事業課係長、堺市民芸術文化ホール副館長

7 議題

- （１） 堺市文化芸術審議会に対する諮問について
- （２） 第 3 期堺文化芸術推進計画の策定案について

8 議事録要旨

開会

＜事務局より説明＞

議題

（１）堺市文化芸術審議会に対する諮問について

◎藤野会長

それでは議題に入りたいと思います。

それでは、「議題（１）堺市文化芸術審議会に対する諮問について」、事務局からご説明をお願いいたします。

＜事務局より説明＞

◎藤野会長

ありがとうございます。当審議会は、堺市長から条例に基づく事項について諮問を受けているということになります。先ほどの説明にもありましたが、アーツカウンシル部会員の皆様には補助金審査において、対応いただくことになります。どうぞよろしくお願いいたします。

議題

（２）第３期堺文化芸術推進計画の策定案について

◎藤野会長

それでは、引き続きまして、「議題（２）第３期堺文化芸術推進計画の策定案について」審議いたします。事務局から説明をお願いします。

＜事務局より説明＞

◎藤野会長

はい、ありがとうございます。最初に概要版のポイント説明があり、次に第３期計画本編について目次順の説明がございました。

以前も話があったと思いますが、堺市の第３期計画の中には、個別の事業は含めない、書き込まないということで良いですね。

●事務局

はい、主な取組というところで、重点的方向性の①～③で、個別事業名ではありませんが、事業の方向的なことを書かせていただいております。

◎藤野会長

では、どなたからでもご意見、ご発言いただければと思います。

○井上委員

すごく分かりやすく良いと思います。親御さんの参加、すごく大事で、こどもだけじゃなくて、親御さんと一緒に作る、見るということが、クラシック等においても良いと思います。クラシック以外では、例えば伝統芸能や能にも求められていくと思います。

私も現場でやっている者としてできる限り、一緒に現場で見ながらアドバイスできれば良いなと思っております。

前回も少しお話したのですが、堺を愛するということ変な話ですけど、皆さんも含めて計画が良くても堺に対する愛がなければなかなか進まないと思います。

文化施設と書いてありますが、それ以外でも魅力的な場所がたくさんあって、例えば地元の町工場等様々な場所でも、文化交流であったり、ものづくり等ができるはずだと思います。

岩手で私が関わっているプロジェクトでは、台湾とインドネシアの方を招いて、3カ国で新しいプロジェクトを立ち上げて舞台作品を作ってきました。そこで地元の方々にもどんどん入っていただいて、そこで文化交流があり、食、郷土芸能を通して新たな文化が生まれています。

堺も堺だけではなく、堺とまた別の何かを繋げるような交流等があれば、「堺っていいね」というふうになると思います。最終的には堺愛になれば良いのではと感じました。

◎藤野会長

ありがとうございます。井上委員は東北の岩手で色々されていますよね。人口減少が止まらない地域ですよね。移住促進のためのさまざまな手を尽くしても、効果がないというような状況の中で、アートに期待するのは関係人口を増やすことです。

○井上委員

おっしゃる通りでして、東日本大震災の津波で被害があって、陸前高田市もまだ街も全然出来上がってない、人口が戻っていない状態である中で、若い人たちが地域の協力隊みたいな形で結構入って、そのまま移住される方もいます。

私も10年くらい関わってきて、こどもたちも大きくなって大学に行く等で東京に出てい

るのですが、「戻ってこい」と呼び掛けています。ただ、やっぱり帰ってくる理由がない訳です。何もない、面白くないじゃなくて、岩手の産業であったり、サブカルチャーであったり、関係人口が増えるように市や県庁に働きかけて、10年でようやく動きははじめました。今では岩手の魅力を発信できるプロジェクトも立ち上げ、関東方面の方が東北に移住することにも繋がっています。

ずっと関わっているのは岩手に対する愛があるからであって、コロナの時でも呼んでもらい、すごく助けられたので、やはり気持ちがあつての人間関係、人との交流が一番大事だと思います。

◎藤野会長

ありがとうございます。関連するようなことで経験をしたことですが、福島あたりは本当に人が戻れないような状況が長く続いているわけですが、経産省が中心になって、新しい産業、ベンチャーを起こすために支援事業をやっているとして、その審査をしました。比較的若い人たちの間で面白い動きがたくさん出てきているなと感じました。

もともとは文化や伝統、特に地域に残っている芸能というのは大切にしなければいけないのだけれど、そこにしがらみや古いしきたりがあつて雁字搦めになっている地域です。今では、若い人たちがのびのびとその場所で新しい事業を起こすことができるようになってきています。

○井上委員

東北地域はリアス海岸で、街ごとに色々な風習があります。津波によって町が被害を受けて、何かしないといけないということで、若い人たちが立ち上がって、郷土芸能を行い、交流し始めています。そこに新しい人たちが集まっています。今やそのこどもたちも郷土芸能を習おうという形になり、守っていくぞということもあって、産業も新たに創出していこうということで、郷土芸能以外のものも、どんどん東北、岩手から生まれ始めています。そうした流れから文化政策に関する予算がつくようになってきています。

堺も同じで今後人口が減っていく中で、未来を担うこどもたちに新たな文化芸術を体感していただく必要があると思っています。

◎藤野会長

興味深いお話、ありがとうございました。何か活かせる点があれば良いかと思います。

○坂成委員

私も概要版を読ませていただき、より良いものになっていると思います。

第3期計画の本編方で、指標とされている重点的方向性①の調整中というのは、後で数字が出てくるということでしょうか。

●事務局

この重点的方向性の評価指標においては、今記載している「1年間に文化芸術の鑑賞した、または文化芸術活動を行った人の割合」で設定を考えております。

この評価指標については、第3期計画の上位計画である堺市基本計画があり、それが今、第3期計画と同じく改定年を迎えております。そこに新たに設定をしようとしているのがこの評価指標となります。そちらとの兼ね合いもあり、現状値と目標値については議論しているところで調整中です。調整が終わり次第、公開していきます。

○坂成委員

分かりました。重点的方向性のすべての評価指標が行政らしく、人数を増やすことに起点を置かれているのですが、参加した人数、例えばイベントですと、収容人数や規模を大きくして数が増えることが、必ずしも中身が充実したことに繋がらないのではと思います。

その後のアンケートで、「参加しましたか？」ということモニターに聞かれるのであれば、満足度みたいなものをつけて、人数が増えてなくても、それに参加したことで満足した人、面白かったと感じた人の割合が増えれば、そっちの方が具体的な効果に繋がるのではないのでしょうか。

大規模にすれば良いというわけでもなく、どうしても数字の目標というのは計画をやっていれば必要だと思いますが、その辺りを将来的にアンケートの質問方法が変われば出てくる数値ももう少し変わってくるのかなと感じました。

また、この秋の地元（地域）のお祭りにおける担い手不足というのが過疎の市町村には結構多くて、祭りの神輿担ぎ手みたいな人たちがレンタルとして、ボランティアで各地に行って、祭りを持続させているというような話も報道等でよく聞きます。

堺市にも、ふとん太鼓と言われる堺独特の神輿があって、それが四国や各地に広がっていて、同じような形態で担ぎ手募集をしている地域がたくさんあると聞くので、堺市も現状では維持できても、将来子どもが減っていくとしたら、祭りも文化の一つかなと思うので、そこにも今後サポートして行く必要があるのではと感じました。以上です。

◎藤野会長

ありがとうございます。2点あったと思いますが、評価指標のところの調整中の記載について、人数を書き込むということは必ずやることですが、それ以上に踏み込んだ深さをどう測るかということが重要だと思います。

満足度というのは、だいたいアンケートでは、「満足しました」「ほぼ満足しました」を合わせて90%以上で、あまりあてにならない。内容によって、面白いものやエンターテイメント系の強いものは、満足度は上がるかもしれないけれど、そうではない特にトンガリ形のもの、満足とは違う何かを指標として立てないといけないと思います。

この審議会では評価指標については深く議論してない感じがするのですが、ただ、委員が必ず年に何回か視察をしてレポートを書いて、こういう定量ではなく、定性評価的なものをきちんとやった上で答申しているところが、堺市はかなり素晴らしいです。

第3期計画本編の27ページの評価のところでも少し触れていますが、文化施策は事業レベルから制作レベルまで対応するのですが、それをどういう風にやれば良いのかをみんな悩んでいます。どこの自治体でも悩んでいます。

もし来年度の審議会ですら少し余裕があれば、堺の今までの経験を踏まえて、特にアーツカウンシルの知見を活かして、堺ならではの評価方法を開拓できると良いなと思います。

今年は計画策定が第一だったということで、次年度は評価をどうしたら良いのか、他の自治体に見本を示せるようなものができればと思います。

それから、お祭りについては宗教行事でもあって、行政が関わることは難しいと思いますが、堺市はどういう風に整理していますか。

●事務局

堺市も担ぎ手不足というところではありますが、おっしゃる通り神事的なイメージがあっ てなかなか踏み込めないところです。

ただ、堺市にはふとん太鼓やだんじりという違った種類の神輿がありますので、その補修等、国庫補助金という形で間接的な補助等については文化財課が窓口となって、文化庁が補助を出しています。

堺市から地元の保存会等にその制度の周知をしておりますので、申請にはもちろん枠も ありますが、それが祭りの維持、継承にも繋がっている側面はあるかと思っています。行政とし ての支援はその程度で、担ぎ手の支援のような人的支援は難しいかと思っています。

◎藤野会長

今のは文化財としての、祭りの文化財部分を切り取ると補助の対象になるということですが、神事、祭祀として見たときには、宗教行為にあたるので、自治体の関与は難しいと思 います。

でも実際に担い手が少なくなってきたいて、これまでは町内会の寄付や檀家さん達に支 えられていたところが、文化なのか観光振興に組み込めるのか、どこかに分けてというところ ですかね。

●事務局

行政が祭りに関わるという事例がなく、我々にはできないのですが、そういうこともある かもしれません。観光資源としての周知として関心を高めていくのは間接的には可能かも しれません。

○永島委員

知り合いから、祭りに関わっている方が脱退したくなるということを聞いたのですが、分からないでもないなと思いました。お金のこともありますが、勤め人にとってはなかなか時間の制約的にも厳しいということです。例えば、休日を返上して祭りに関わらないといけない、祭りの開催時には家を開放して皆をもてなす等、現代人にとってはかなり負担が大きいのだと思います。また、神輿担ぎ隊の人たちが来られるので、現実的には非常に複雑な状態になっているようです。

◎藤野会長

現代になるにつれて産業構造が大きく変わって、農業や商工業で支えていた、いわゆる地主達が皆サラリーマンになって、そんな時間がないところも増えたと思います。全体的に祭りを支える構造というの、今のジェンダーバランスを考えるとちょっとゆがみがありますよね。

だから、そういった社会構造と産業構造が大きく変わってきているのに、昔ながらの伝統的な行事を同じように維持していくことはなかなか厳しいと思われます。

○永島委員

祭りを実際にやるとすごく多くの観光客が来られたり、街が賑わったりしているのを見ると、やる人たちの気持ちも変わってくるかもしれません。産業構造に結び付けていくということ言えば、現実的なメリットが得られれば、昔のしがらみに新しい力が加わるかもしれませんが、なかなか文化行政としての関わりは難しいかと思います。

第3期計画についてですが、見る人にとっては堺の文化行政に詳しくない人もいると思うので、文化行政の繋がりがわかる相関図みたいなのがあれば良いかと思います。また、小さくても良いので堺の地図等を入れていただければと思います。あとは計画を作った後にどう魂を込めて事業を実施していくかですね。

◎藤野会長

ありがとうございます。永井委員、お願いします。

○永井委員

祭りに関して実感したことなのですが、以前、ふとん太鼓のある地域に住んでいました。

私は外から来まして、少ししか居なかったので見に行くだけだったのですが、話を聞いてみると、本当に入り込んでいる方とそうでない方に分かれています。元々住んでいる方と後から越してきた方との違いとして、後から新しいマンション等に越してきた方は、祭りに関わりたいと思っても、すごく下の方の仕事からやらされたり、連絡係をやらされたりと、なかなか担ぎ手にはなれないか、もしくは初めから全く関わりたくないかのどちらかに分か

れているという印象を受けました。

堺の中でも祭りのやり方はいろいろで、私が住んでいるところはこども神輿があって、こどもたちも大人たちも楽しく参加しているのですが、小学校 5、6 年生にもなるとちょっと恥ずかしいから出たくない様子で、そこをどう繋いでいくべきかと思いました。

また、堺とは別の地域のことですが、その地域の祭りに参加するために観光に行くという祭り体験付き観光みたいなのがあるとニュースで見て、それも面白いなと思いました。

第 3 期計画についてですが、資料 3 の「第 3 期堺文化芸術推進計画の重点的方向性と重点的施策」のところでは、広い意味での茶の湯の精神性というところや、他者との尊敬ある交流等、広く捉えているところが、特徴的で良いと思いました。

いくつか気になったところをお伝えすると、重点的方向性と重点的施策の本文の 5 行目に、「文化芸術がこどもたちを育成」と書かれていますが、前後の文章と合わせて単語で終わらせているかと思いますが、ここは「文化芸術がこどもたちを育成する」と、文章を終わらせて次に繋げて良いのかなと思いました。

また、その続きで、「同じく 3 つの重点的方向性」と書かれていますが、この 3 つは第 2 期計画と同じなのか第 3 期計画と同じなのか、分かりにくいと思います。どの計画と同じくのか追記しても良いかと思います。

次に右側の重点的方向性②に、「重点的施策 2-1：未来を担うこどもたちへの文化芸術に触れる場の充実」と書かれていますが、充実と書くのであれば、その前の「未来を担うこどもたちへの」、「への」というのは要らないと思います。「未来を担うこどもたちが文化芸術に触れる場の充実」の方が良いかと思います。

◎藤野会長

ありがとうございます。どのご指摘も一考に値すると思います。事務局と調整させていただきます。

では、藤原委員お願いします。

○藤原委員

3 点ほどお伝えしたいと思います。

1 点目は概要版が 2 枚になったことで、すごく見やすくなりました。また、アーツカウンシルの皆さんの写真が入ることで相談相手のお顔が見え、相談したいと思う内容になっているかと思います。

2 点目ですが、事前にメールにて頂いておりました概要版にて「茶の湯が息づく堺（伝統×革新）」の記載があり、茶の湯に対する熱い思いがあるなと思いました。今日の資料では概要版 2 枚目の左上の本文中の一部に記載されており、少し残念に感じました。堺ならではの茶の湯文化を表すようにここに記載されたのかと思いますが、少し分かりづらくなったのかなと思います。

3点目は、概要版2ページ目の「第3期堺文化芸術推進計画の重点的方向性と重点的施策」に茶の湯文化が持つ美意識や精神性を重視することと、茶の湯が心の安定、他者との尊敬ある交流、物事の本質を見つめる力につながるということが記載されており、個人的には茶の湯の素晴らしさを端的に表してくれていると思います。ただ、茶の湯に親しみが無い方にとっては少し重たく受け止められるのではないかと思います。

以前、茶の湯まちづくり条例を制定された際のパブリックコメントにて、市民の皆さんのご意見として茶の湯の精神を浸透されることについて少し懸念を示す意見もありましたし、押しつけてはいけないかと思います。

●事務局

何を大切にしてく行くかについては、多くの選択肢がある中で、堺はお茶の生産地ではありませんが、千利休が生まれた街です。お茶に関連する和菓子や線香といった様々な産業もあります。文化芸術基本法にあるように文化芸術には様々な形があり、行政として取り組む中で茶の湯を最重要視するわけではありませんが、茶の湯条例を作ったことを鑑みれば、そこに重きを置いているということになると思います。

この第3期計画では、茶の湯だけに注力するのではなく、そこに軸足をおいて文化施策を進めていくということです。それについては、ご説明をしてご理解を求めていくということになります。藤原委員のおっしゃるように、重要視しつつも押しつけがましくならないように配慮しながら施策を進めていきます。

○藤原委員

茶の湯関連のイベント等を実施される方は、さかい利晶の杜をはじめ、茶の湯関係部署のスタッフや参画されている先生方になるのでしょうか。

●事務局

さかい利晶の杜が、常時茶体験ができる施設ですので、指定管理者の従業員、千家の先生方や、その他、お茶に関わる様々な方が事業実施に協力いただいております。行政、文化課の中にもお茶の事業を担当している部署もありますので、その職員やお茶に携わる関係者で進めていくことになるかなと思います。

○藤原委員

茶の湯の専門家だけで固める必要もないと思っており、井上委員がおっしゃるような新たな取組を実施しないと、今までのアプローチのままだと広げていくのは難しいと思います。ですので、茶の湯に関連した新たな取組を進めてもらえればと思います。

●事務局

革新という言葉の一部使っているのは、藤原委員がおっしゃっていることを意識して記載しています。堺市やさかい利晶の杜等もいろんな可能性に挑戦しているつもりですが、これからも先生方のお力をお借りして新しい可能性を広げていけたらと思っております。

◎藤野会長

ありがとうございます。まだ少し時間がございますので、台本にはありませんが、本日参加されている方々にお話をいただければと思いますが、上田プログラム・ディレクター、いかがですか。

○上田プログラム・ディレクター

はい、言葉のことで気になる点がございまして、資料3の重点的方向性③の3-2です。

「堺が誇る茶の湯文化のブランド力強化」と書かれていますが、先ほど藤原委員がおっしゃったように「伝統かける革新」という言葉がありましたが、ブランド力強化とここに書かれている精神性や、本質を見つめるという言葉がちょっと合わない気がします。

もし、「伝統と革新」というところが、この第3期計画の中で大事だとしたら、「ブランド力強化」ではなく、「伝統と革新」という風に進めるというのも良いのかなと思います。

また、堺のことをあまり知らない人が見た時には、資料3の概要版の1枚目に写真がたくさん載っていて見やすくなったと思いますが、私は車の写真を見た時、「これは何？」と思いました。キャプションを入れるとなると、全てに入れられないといけないでしょうが、少し分かりづらいと思いました。

資料3の第3期計画の概要版については、2枚目に書かれている第3期計画の肝心なことを1枚目に持ってきて、2枚目に第2期計画の振り返りを書かれる方法もあるかなと思います。

アーツカウンシルのこともこのようにピックアップして記載いただいてありがとうございます。

◎藤野会長

ありがとうございます。財団からどうぞ。

○公益財団法人堺市文化振興財団事務局長

質問ですが、重点的方向性における評価指標で、②は13,000人、③は26,000人となっていますが、それぞれ設定した根拠を教えてください。

●事務局

重点的方向性②で示している評価指標の現状値9,671人というのは、堺市教育委員会が

行っている交響楽団芸術鑑賞事業を小学生の鑑賞した人数と文化振興財団が行っているアウトリーチ事業を足した人数となっています。令和12年度の目標値については、横浜市が同様の計画で似たような指標を用いており、その増加率を参考にして設定をしました。

重点的方向性②の中で、保護者も体験するというのも入れておりまして、数値の取り方は現状値の内容だけではなく、工夫をしたいなと思っています。例えばフェニーチェ堺では、こども向けに夏休みのワークショップ的な事業をやっておりまして、各文化会館でこども向けのそういった事業を増やしていきたいと思っています。

小学校の生徒数が減っておりますので、学校単位で、文化施設にインリーチする人数は減ると思いますが、アウトリーチは増える余地があると思っていますので、横浜市に習っての数値目標を設定しています。

重点的方向性③の呈茶体験人数というのは、さかい利晶の杜や大仙公園には伸庵という茶室もありますので、その体験人数を掲げています。評価指標の目標値は重点的方向性①と同様の伸び率を基に数値を出しております。

○公益財団法人堺市文化振興財団事務局長

資料2の22ページからの推進体制の中でフェニーチェ堺の部分ですが、「小ホールは音楽のみでなく、演劇や伝統芸能等にも」と記載していますが、大ホールでも演劇も伝統芸能も行っているの、この記載内容については再度担当と調整をしてください。

また、同じ部分でフェニーチェ堺やさかい利晶の杜に施設の設備の話が書かれていますが、他の文化会館のところには書かれておりません。推進体制の部分なので設備面の記載はなしでも良いかと思いました。

そして、10ページに（仮称）堺ミュージアムの記載はありますが、第3期計画の中ではどのようなイメージなのでしょうか。

●事務局

（仮称）堺ミュージアムについては、藤野会長にも懇話会のメンバーにも入っていただき進めているところですが、現状はこのレベル感で、次の5年を見据えての書きぶりとなっています。

◎藤野会長

ありがとうございます。反対に一番大きな中核組織である財団の側から、課題みたいなものがあれば、教えていただけますか。

○公益財団法人堺市文化振興財団事務局長

では、この第3期計画に関して主要なところを申し上げますと、1番難しいと思われるのが、重点的方向性②「文化芸術がこどもたちを育てる」という中の事業で、人数のアウトプ

ットを稼ぐ話があるのですが、今のマンパワー等を考えると、ご期待いただけるほどの数を稼げるかどうかはちょっと分からないということです。

●文化国際部長

重点的方向性②「文化芸術が子どもたちを育てる」というのは、文化振興財団に補助金を出している主体的な事業のほかに、先ほど事務局が申しましたように、カウントは今まで教育委員会と財団が実施する事業のみとしておりました。ただ、充実させるために今まで文化会館等で実施している 0 歳児からの鑑賞事業であったり、いろいろな先生方のお力をお借りしてのワークショップ的なものであったり、子どもたちを巻き込んで、保護者も含めての事業展開というのをやっていきたいと考えております。そういった数字も含めて目標を設定しております。

今の財団が行っているアウトリーチ事業数がそのままで良いという話ではないのですが、それだけを上げてこの目標数値に持っていくという考えではないことだけ申し上げておきます。

◎藤野会長

この計画に関連しない財団の課題についても教えてもらえますでしょうか。財団が行っている事業の運営全般での課題について知っておきたいというのも、関西圏の文化施設の代表の方とお話をしていて、クラシック事業に人が入らなくなったということや、人手不足、特に裏方が足りず、舞台監督のみならず、裏方の日程に合わせて公演を組むようにしないとなかなか回らない等、コロナ後は人が戻ってきたように見えるけど、やり繰りが非常に大変だったということを聞きました。

それら比べると、フェニーチェ堺は比較的うまくいっているのかどうか。それから、尼崎市のアルカイックホールが 5 年間の大規模改修があります。規模的に共通していますので、フェニーチェ堺にどう影響があるのか、びわ湖ホールも来年の 7 月から 20 か月全館閉館と、関西において大規模感のあるホールが減っていく中でのフェニーチェ堺の立ち位置等、その後も含めてお願いします。

○公益財団法人堺市文化振興財団事務局長

まずフェニーチェ堺の話をしますと、おかげさまで 5 年目にして、利用者の数はかなり増えており、目標値も上回っているという状況になっています。

その背景には認知度が上がってきたことがあげられます。特に 1 回公演されたアーティストの方が、「ここはとても良いホールだ」と、音響等も含めて言われるケースが多く、リピーターになっています。そういう意味でいうと、大ホールの休日の稼働率は 100%に近い状態なので、これ以上多くの人を集めるのは難しいかなという風に思っております。

ただいま藤野会長のご指摘にありました、この業界で今一番問題になっているのが、裏方

の人手不足に加え、労働時間規制というのがあります。深夜労働もやってはいけないということで、昔は 21 時半位までコンサートをやって、終了後 23 時や 24 時まで作業するのが当たり前になっていたのですが、今はそれができなくなっています。

そのため、公演の時間を夕方開始にする、ポップス等集客できる事業も 19 時開演は絶対できない等、深刻な状況になっています。

また、舞台関係者の人材育成がうまくいってなくて、うちもスタッフがずっと 1 人欠員で、募集はしていますが、正直取り合いになっています。

そのうえ会長がおっしゃられたように、各大型施設の閉鎖や一時休館があり、また東京の方でも施設が建替時期や閉鎖になってきており、東京でやる場がないので関西に来たいという声が聞こえてきます。その中では、フェニーチェ堺の選ばれる率が高くなり、東京から公演のオファーがかなりあるので、その辺をどうしていくかと思っております。

滋賀に続き、京都コンサートホールも一時期閉めると聞いているので、外部からの公演をさばくのが大変だなと思いますけど、決してそれで儲かるわけではないので、財団としてもどこまでやれるのか考えあぐねているところです。

大ホール等の使用料はこれ以上稼げないので、そこで大きく持ち出す事業ばかりしていると、華やかさはありますが、経営のことを考えると厳しいかと思います。今の現時点ではこのあたりがフェニーチェ堺の舞台関係の課題だと考えています。

◎藤野会長

正直なお話が聞けて良かったです。私の知っている施設の話ですが、文化ホールは極端なことを言えば、黙っていても回ります。自主事業をやらないで、貸館収入だけで回せるという話になりますが、そうすると財団の意味がなくなってしまうわけです。でも、それではまずい訳で、財団を強化して新しい文化ホールでも財団が指定管理を取れるようにという戦略でやっているみたいです。周りの状況が変わってくると、堺も自主事業については、そんなにやらなくてもいっぱいになるのではないかという声はないですか。

○公益財団法人堺市文化振興財団事務局長

今まさに会長がおっしゃられたように、我々も自主事業をやらない財団なんて要らないという風に思っています。

ですから、貸館にすれば、ポップス等をいっぱい入ればもっと収支は良くなると思いますが、市民利用を減らす訳にはいきませんし、自主事業もやりたいと思っていますので、その辺はバランスを考えながら、経営の中でやっていくしかないのかなと思っています。

○坂成委員

ちなみにその稼働率は大ホールで 100%に近いとおっしゃっていますけれども、自主事業と貸館の割合はどれぐらいですか。

○堺市民芸術文化ホール副館長

令和 6 年度実績で言いますと、自主事業と言われる部分としては全体の年間事業の中で 57 事業です。57 事業のうち通年事業等がございますので、全体で 126 回の事業になります。残りの部分が貸館ということになります。自主事業が 3 分の 1 強で、残りの半分が市民利用でもう半分が興行的な利用となります。だとすれば、100%の稼働率というのは少々言い過ぎでして、平日の夜の市民利用は少ないです。

○坂成委員

今よく聞くのはコロナ禍のことだと思いますけど、週末の夜のチケットというのが売れないとよく聞きます。なので、上演時間を前倒して金土日であっても早めの 16 時頃からの開始となっています。上演時間もコロナの時に短くなって、そのまま長い公演が敬遠されるような状況が続き、例えば演劇においては、3 時間が普通だったのですが、休憩なしの 2 時間公演が主流になってきています。値段は変わらず、コンパクトになって、しかも昼公演中心となりつつあります。

◎藤野会長

公演の開始時間が前倒しになると、週末の特に金曜日は働いている方は来られないですよ。最近、公演に来られる方を見ていると本当に高齢化がめだちます。20 年前の人たちが、そのまま 60 歳の方が 80 歳になられたという感じです。その下の世代が充分に育っていない、若い人たちがそこに参入していないというのは、これはこれで厳しいと思います。

もともと昼に自主事業を設定しているので、高齢の方にとっては、夜公演はますます行けなくなります。

海外の場合、長いオペラだと 24 時に終わります。コンサートでも 23 時に終わるのは当たり前で、それから帰ります。もちろん高齢者もそれから帰るわけですが。平日でも 24 時に終わりますので、日本では考えられないです。治安は日本の方が良いのに。交通機関のことも含め、ヨーロッパと日本における公演の仕組みや文化の違いを感じますね。

○坂成委員

文楽も今はほとんど 20 時や 20 時台前半で終わるようになっていきます。夜は本当に数えるほどしか人が入らないです。

◎藤野会長

インバウンドで人は増えているのではないですか。

○坂成委員

文楽はそうでもないですね。

歌舞伎の顔見世でも、少し前までは終わりが夜の 22 時半から 24 時を回ることもありましたが、今は大体 21 時前、20 時半ぐらいで終わるような組み方になっています。

◎藤野会長

それも裏方の労働規制問題ですか。

○公益財団法人堺市文化振興財団事務局長

それ以外にも今聞いているのはミュージカルやポップス等の大規模な演出が必要なものは、それを運んでくるトラックのドライバーがいないという話で、全般的に働き方のあり方が影響しているのは確実だと思います。

○坂成委員

裏方の労働規制やフリーランスの方の基準が変わったということですか。

○公益財団法人堺市文化振興財団事務局長

というよりも、フリーランスが働いておられる舞台業者や設営業者に勤めておられる方々の労働規制ですね。

◎藤野会長

そろそろ話をまとめたいと思います。

危惧というほどのことではないのですが、今お話をお伺いして、この第 3 期計画にフェニーチェ堺のことが出てきていますが、フェニーチェ堺やさかい利晶の杜による「魅力ある事業の拡充」という言葉ですが、外部環境が変わってきた時に、フェニーチェ堺が関西で際立って行っているような、自主事業的なものを担保できるだけの言葉を持ち得るのかということです。

審議会としても、これは財団だから聞き流すではなくて、本丸ですから、どうにかサポートするような言葉も持ちたいなと思っていますし、財団内でも理事会がある訳ですから議論をいくつもしなければいけないとも思っています。

「こどもが・・・」や「さまざまな障害を持つ・・・」という社会包摂的な部分は非常に理解されてきておりますが、大人が本格的に楽しめるものというのが減っていくのではないかなという感じがします。お金もかかりますし、大人が本格的に楽しめるものをどうすれば維持可能なのか、それについて財団のほうでは議論されていますか。

○公益財団法人堺市文化振興財団事務局長

財団では、そもそも世代を問わず来ていただくというのが基本になっております。先ほど

からの議論のように、来てくださる方の多くが高齢者で、落語の公演等は昼間の15時開演で、300席がほとんどの回で売り切れております。

文楽に関しても平日の昼間に公演を行っていますし、200名程が来られますが、やはり若い人は来られないですね。

クラシック関係については、出し物によってかなり客層が違いまして、例えば、先日行いましたミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団の時、若手の藤田真央さんという有名なピアニストが来られたので客層もかなり若くなりましたし、バレエだと若い女性客も多く来られます。財団としてはバラエティーに富んだ事業を取り組むことで、幅広い客層を集める方針にしております。

○永島委員

最近では音楽学部の学生でもクラシックに行くという学生はかなり少ないです。なぜかというと、最近の音楽というのは座って聴くというより、踊りやダンスが付いていないとダメみたいで、音楽のあり方自体が変わってきているように思います。

概要版の話で、藤原委員がおっしゃっていました茶の湯の精神の部分ですが、「茶の湯文化が持つ美意識や精神性（互いを敬い思いやる心やわびさびの精神等）」で、「精神」が2回出てくると重たさを感じてしまうのかと思いました。

◎藤野会長

はい、ありがとうございます。今日はフェニーチェ堺の事業運営の方法や傾向が分かって良かったと思います。いずれこの審議会でもフェニーチェ堺の経営方針をサポートするような議論をしたいなと思っています。

たくさんの意見をいただきまして、ありがとうございました。これらの意見を吟味して事務局と私にて修正対応致します。

それでは、予定の時間になりましたので審議会を終わります。ありがとうございました。